

『鬼平犯科帳』に見る舞台回しとしての女の力
—「むかしの女」の蘇生と鎮魂—

難波江 和 英

The Driving Force of a Woman as a Stage Producer in *The Case Files of Onibei*
— Resuscitation of and Requiem for “A Woman from the Past” —

NABAE Kazuhide

Abstract

This article features a character named Oroku in “A Woman from the Past” (1968), a short story in *The Case Files of Onihei* by Shotaro Ikenami, and demonstrates that her female sexuality is controlling the flow of this narrative, both underlying and undermining the myth of “*Onihei*=the world of men.” From here follows a conclusion that “a woman from the past” symbolized by Oroku has been calling for a ritual of condolence, claiming her long-deserted presence should be recalled in mourning.

What is noteworthy about Oroku is that, taking advantage of her past career as an illegal prostitute in the late Edo period, she demands hush money from her ex-clients to conceal their confidential relationship with her. In effect, she starts serving as a stage producer in tragicomedies throughout the story. Her ex-clients, on the other hand, reluctantly yield to her requests because they place higher priority on maintaining their reputation. Consequently, the presence of Oroku as an illegal prostitute revives, gaining social value corresponding to the amount they have paid to her.

It is true that Oroku has actually extorted money from her former clients. Symbolically, however, it is the echoing curse of long-lost women from the past like Oroku that has forced these men to remember her and make up for their amnesia with the compensatory money they have handed over to her. Seen against this backdrop, Heizo Hasegawa (*Onihei*), General of the Special Operation Forces, plays an essential role at the end of the story in conducting a ritual of resuscitation of and requiem for those women as he determines to set up a grave for Oroku in his family temple, thereby leaving a sign to indicate both the death of this stage producer and the presence of many other women from the past.

Keywords: Female Sexuality, Stage Producer, Commodification of Sex, Curse, Requiem

要 旨

本稿は池波正太郎著『鬼平犯科帳』の短編「むかしの女」（1968年）に登場するおろくに焦点をあて、その女性性が物語の流れを操り、「『鬼平』＝男の世界」という神話を支えると同時に揺るがしていることを論証する。それを踏まえ、おろくに象徴される「むかしの女」は、この世に存在しなかったものとして見捨てられた我が身を弔えと訴えながら、哀悼の儀式を求めていることを結論として導く。

注目すべきは、すあいおんな牙僧女（江戸後期の非公認の売女）だったおろくが、昔の客たちから過去の関係の口止め料を奪ったことである。それにつれ、おろくは物語で起こる悲喜劇の舞台回しを演じ始める。他方、昔の客たちは公私にわたり体面を保つため、おろくのゆすりに屈してしまう。その結果、牙僧女として日陰の身を生きたおろくの存在は、彼らの貨幣と等しい交換価値を帯びて世間に蘇る。

おろくはたしかに昔の客たちをゆすったが、象徴的に見れば、彼らにおろくを想起させ、記憶喪失の代価を払うよう強いたのは、おろく同様、長らく忘れ去られた「むかしの女」たちから響く女性性の呪い＝祟りである。それに照らせば、盗賊改方長官・長谷川平蔵は、物語の最後でおろくの亡骸を自分の菩提所へ葬ると決めたとき、おろくばかりか、他の多くの「むかしの女」のためにも蘇生と鎮魂の儀式を司っていたと言える。

キーワード：女性性、舞台回し、性の商品化、呪い＝祟り、鎮魂

序

『鬼平犯科帳』（以下、『鬼平』）は、池波正太郎（1923-1990）が1967年から1990年まで「オール讀物」（文藝春秋）に連載し、『剣客商売』や『仕掛人・藤枝梅安』と並んで著者の仕事を代表するシリーズ（文春文庫・「決定版」24巻、番外篇1巻の全25巻）になった時代劇の名作である¹。

舞台は江戸後期（1787年頃-1795年頃）、物語は盗賊の取り締まりに活躍した火付盗賊改方（以下、盗賊改方）^{ひつけとうぞくあらためかた}の捕物帳、いまなら警視庁特殊部隊の逮捕劇のようなものだから、一般には「男の世界」を描いた作品と思われている。全シリーズの主人公となる盗賊改方の長官・長谷川平蔵からして、並み居る盗賊たちに「鬼の平蔵」、略して「鬼平」と恐れられている男。平蔵配下の与力や同心も、佐嶋忠助、酒井祐助、沢田小平次、松永弥四郎、小柳安五郎、木村忠吾のように、もちろん男。主たる密偵も、おまさとお糸を除けば、相模の彦十、小房の糸八、大滝の五郎蔵、舟形の宗平、伊三次、岩五郎のように、男ばかり。

他方、盗賊たちにしても、スリや引きこみ役はともかく、「親分」と呼ばれる連中はほとんど男である。本格派の首領格だけでも、たとえば蓑火の喜之助、海老坂の与兵衛、夜兎の角右衛門、鈴鹿の又兵衛、羽佐間の文蔵、飯富の勘八、雨乞いの庄右衛門、猿皮の小兵衛、傘山の弥太郎、櫛山の武兵衛、西尾の長兵衛、牛尾の太兵衛、船影の忠兵衛、蓮沼の市兵衛…それに比して、目ぼしい女賊となると、猿塚のお千代、搔堀のおけい、津山薫（森初子）、荒神のお夏と数えるほどしか登場しない。これらの女賊には、最初の二人のように40歳を超えた美魔女もいれば、あとの二人のように同性愛者も含まれ、男の盗賊にはない妖艶な魅力が溢れている。但しそれだけでは、「『鬼平』=男の世界」という図式は揺るぎそうにない。

この印象が一変するのは、盗賊改方の捕り物からズームアウトし、物語や事件の流れを生み出し、押し進めている動因そのものに注目したときである。たしかに表舞台では男たちが動き回っているものの、それは所詮、水面上に浮か

びあがった上部構造の事象にすぎない。そこで展開している動きは、その水面下に広がる下部構造を担っている女たちの動きとリンクし、むしろそれによって規定されている。そう考えれば、『鬼平』=男の世界」という図式は、かなりあやしくなってくる。『鬼平』の全巻を通じて、その図式を下支えしながら、それを根底から揺るがしてしまう女の存在は、それほど連綿と続いているからである。

たとえば最初の1巻に収められた8編から、目につく例を並べてみると、お磯、おふじ、おふさ、お勝、お千代、おとよ、おみち、おその、おもん、お松、そしておろく…このいずれもが、男たちの影に隠れながら、男たちの所業を演出し、登場人物であると同時に舞台回しとして生きる女たちの系譜をつくり出している。それはまさに、江戸の世間は女で回る、という様相でさえある。見方を変えれば、『鬼平』の世界では、武士であれ商人であれ町人であれ盗賊であれ、どうしても女に引き寄せられ、操られ、生かされも殺されもする男たちが蠢いている。つまり女は、彼らにとって、生殺与奪に深く関わり、人生の行く末を左右する他者として絶大な力を振るう存在だったと言える。

たとえば、最初の2巻から事例を拾っただけでも…盗賊改方の同心・小野十蔵が自決することになったのは、盗賊の夫を殺した女・おふじを逃したばかりか、彼女と関係までもったからである（第1巻「唾の十蔵」）。年老いた盗賊・喜之助が、せっかく昔の情婦・お千代の墓参りで余生を送っていたのに（これ自体すでに、女が草葉の陰からでさえ男を支えていることを証明しているのだが）、わざわざ新たに盗めを画策し、裏切った手下と刺し違えて死ぬことになったのは、お千代ばかりか、亡き母を思わせる大女・おとよに惚れ、この世で最後の夢を見ようとしたからである（同、「老盗の夢」）。蛇の平十郎配下の彦の市が、囲い女・おそのを寝取った間男を殺して逃亡したのに、一年足らずで舞い戻り盗賊改方に捕まったのは、おそのを忘れられなかったからである（第2巻「蛇の眼」）。怪盗・葵小僧芳之助が押し入った先々で女を犯し続けた挙句、平蔵に首を刎ねられたのは、自分を裏切った水茶屋の女・しのぶへの憎悪を歪んだ形で晴らそうとしたためである（同、「妖盗葵小僧」）。お調子者の同心・

木村忠吾が鈴鹿の又兵衛一味の捕縛で手柄を立てたのは、それとは知らないまま、又兵衛のひとり娘・お雪と恋仲になったからである（同、「お雪の乳房」）。小金井の万五郎が百姓から盗賊になったのも、18歳のとき女のことで殺傷事件を起こしたからだし、独り占めした1000両近くの強奪金を30歳ほど年下のおけいに奪われて死んだのも、その下女に手をつけたためである（同、「埋蔵金千両」）…

こうした事例は『鬼平』のほぼすべてのエピソードに認められるのだが、『鬼平』に関する論文や書籍で女の働きを論点にしたものは、なぜかまったく見あたらない。西尾忠久の『「鬼平犯科帳」を助太刀いたす』は、珍しく、平蔵の密偵・おまさと妻女・久栄にそれぞれ一章を割いているが、両者の人となりを経典に即して解説しているにすぎない。それを除けば、論文なら笠井哲の「池波正太郎『鬼平犯科帳』における人間観」や鶴田武志の「池波正太郎『鬼平犯科帳』のイメージ形成を巡って」、書籍なら西尾忠久の『「鬼平犯科帳」に恋して候』、里中哲彦の『「鬼平犯科帳」の真髓』、重松一義の『鬼平・長谷川平蔵の生涯』などもある。これらはいずれも『鬼平』という作品への愛に満ち、池波ファンや鬼平ファンへの贈りものになっているが、やはり「物語や事件の流れを生み出し、押し進める動因そのもの」として女に焦点をあてた書きものではない。本稿はそうした状況を踏まえ、『鬼平』の世界でかけがえのない働きをしながら、これまで日の目を見なかった女の存在を掘り起こし、舞台回しとしての女の力＝女性性に光をあてる初のモデルケースと言える。

ここで対象にするのは、それゆえ、『鬼平』の一般読者には忘れ去られるほど脇役に見えるのに、名もなき無数の女たちの代表になれるほど存在感を放っている一人の女が最適である。それなら、池波正太郎編『鬼平犯科帳の世界』でも「全登場人物索引」にしか出てこない女、『鬼平』の第1巻に収められている8編の最後にあたる「むかしの女」（1968年）に登場する元^{すあいおんな}牙僧女（呉服や小間物類の取り次ぎ販売をしながら、裏で「色を売る」（323）女）・おろくを措いてほかにない。おろくは男の記憶の中で眠る「むかしの女」の象徴であると同時に、なんと盗賊改方長官の長谷川平蔵にとっても「むかしの女」だけ

らである。このおろくという女の過去と現在を背景に、性の商品化としての性売買²をめぐる事件が展開する物語、その意味で、「むかしの女」という短編を舞台回しとして動かしているのも、やはり女と言える。それゆえ『鬼平』の他の物語と同様、ここでも女の女性性は物語の動因として生きている。いや、これはその女が殺される物語であり、その女を弔うことの意味を問う物語である。そこから、おろくはもとより、おろくのように世間で長らく忘れられていた無数の「むかしの女」も、蘇生と鎮魂への道を開かれるだろう。

I おろくと長谷川平蔵

「むかしの女」という物語の現在は、平蔵が老中・松平定信へ人足寄場設置の建言を行なった寛政元年の「一年後」(317)ということになっているので、寛政2年(1790年)。平蔵が生まれたのは、実在した長谷川宣似のぶため(通称・平蔵)と同じく延享2年(1745年)という設定だから、このとき45歳。「むかしの女」とは、平蔵が19歳のとき出会った牙僧女・おろく。そのころ26歳、いまは52歳という設定である。

ここからしばらく、平蔵とおろくの間で26年前に起こったことと、その26年後の現在、二人が再会したときに起こったことを見てみよう。「むかしの女」としてのおろくが、いまなぜ平蔵の前に現れたのか。そのとき平蔵は、おろくのために何をしてやったのか。それをおろくはどう受けとめたのか。二人のやりとりのすれ違いは、どこから生まれたのか。おろくは平蔵から厚意を受けながら、なぜ悪の道へ進んでしまったのか。おろくは昔の客たちに、どんな要求をしたのか。それは当事者の男たちにとって、そして世間において、何を意味したのか。おろくと悪党一味の接点は、どこから生まれたのか。おろくが事件に巻きこまれたとき、平蔵の初動捜査はなぜ遅れたのか。おろくの死は何を象徴していたのか。物語の最後で平蔵がおろくを弔うことになる意味は、どこにあるのか。これらすべての問題が、「むかしの女」の女性性とどう関係するのか。その鍵がここからの解説に埋めこまれている。

牙僧女をしていたころのおろくは「男ごろしの異名」(328)を取り、「女ご

かりのあぶらの乗った肌身」を摺り寄せ、平蔵を「虜」にしたほどの女だった(324)。他方、そのときの平蔵とは言えば、第1巻の「本所・桜屋敷」に詳しく書かれているが、義母・波津の仕打ちから家に寄りつかなくなり、「自暴自棄の血気にふくれあがっていた若者」、しかも「おろくのひも」のような存在だった(ibid.)。その当時のことを振り返ると「じっとりと冷汗が浮いてくる」(ibid.)、と平蔵自ら認めるほどの悪行三昧。おろくの金を奪って飲食したり、配下の無頼たちに配ったり…しかしおろくが他の男と関係をもつと「嫉妬」(ibid.)から殴る蹴るの暴行、ついには怒りに駆られ、おろくの胸肌を脇差で傷つけながら飛び出してしまう始末。人は変われば変わるものだが、長い目で見れば、そんな平蔵をいまの盗賊改方長官にまで育てあげるのに、このときのおろくも(やはり女として)一役買っていたことは間違いない。

それから四半世紀余りの歳月が流れ、おろくは針売りで日々を食い繋ぐ暮らしぶり、五年ほど前に患った大病で「骨の外れた風」(327)同然、いまや「干魚のように骨が浮いた老婆」(320)にしか見えない。そんなおろくが、盗賊改方長官になっている平蔵へ道端で声をかける。昔の関係をネタにして、平蔵に「金をねだる」(325)ためである。しかし最初、平蔵にはそれが誰かさえわからなかった。そこでおろくは襟元を開いて、「長さ四寸ほどの切傷のあと」(320)を見せる。それは平蔵にとっては「おろく」を意味する記号になり、おろくにとっては「昔の関係」を意味する記号として、平蔵へ「金を…」と無言で訴える。

平蔵は相手がおろくとわかると、そこから、自分になんらかの助けを求めているのかと推察し、救いの手を差し伸べようとする。「おれに何か、たのみごとでもあるのなら遠慮なくいってくれ」、「いまのところ、金ですむことかえ？」(321)。おろくの懐へ3両入った財布をそのまま押しこんで、「足らぬところは、いつでも清水門外の役宅へたずねておいで」、「お前と久しぶりに酒でもみたいが…今夜はちょいといそがしいのだ」(ibid.)と伝える平蔵。氣勢をそがれて呆然としたのは、「金をねだる」ことを考えていたおろくのほうである。「私あ。何だかこう、気圧されちゃったよう」(322)。

おろくがそう漏らした相手は、やはりかつての牙儷女で、いま本所の裏長屋と一緒に住んでいるおもん婆である。おもん婆に言わせると、平蔵に「かるくあしらわれた」(ibid.) 格好のおろくではあるが、平蔵が自分のことを覚えていてくれたばかりか、役宅へ訪ねてこいとまで言ってくれたことがうれしく、おもん婆の前では得意満面、「天にもものぼるといった顔つき」になる(330)。他方、それを聞いたおもん婆は、「おやしきなんかへたずねて行こうもんなら、それこそ取っ捕まって、石川島の寄場送りだ」(322)と本気にしない。しかし平蔵はおろくに伝えたとおり、いまも昔も、自分の「中身に变りはあるものか」(321)と本気である。

平蔵とおろくのやりとりについて、ここまで長々と説明してきたのには、それなりの理由がある。何より、おろくの胸元の傷跡を見た平蔵が、彼女へ手持ちの3両を渡したことの意味を考えたいからである。言い換えれば、刀傷という記号と3両という貨幣の交換、そこに見られる一種のコミュニケーションがどういう性質をもつものか、それを明らかにしたいと思う。

言うまでもなく、あるものの意味はその中に存在しているというより、それが置かれている文脈から生まれる。たとえば、言葉の意味はその好例である。他方、いまのケースなら、刀傷という記号と3両という貨幣の交換が意味するのは、それが行われた文脈、つまり平蔵とおろくの関係性、それも特に現在の関係性を踏まえなければ明らかにならない。わかりやすく言えば、おろくの行為は、はたして「ねだる」と表現できることだったのか、それとも「ゆする」、「たかる」と表現せざるをえないことだったのか、はたまた、そのどちらとも違う何かを意味していたのか。おろくが平蔵に声をかけた場面を振り返り、そこから両者の関係性を取り出そうとしたのは、このわかりやすそうで、わかりにくい問いに答えるためである。

ポイントになるのは、おろくが平蔵に再会したとき「あの…すっかり、ごりっぱにおなりなさいまして…」(ibid.) と、おろおろしながら語りかけたことである。そのときの平蔵の返答が「なあに、中身に变りはあるものか」(ibid.) だったわけである。もし平蔵が「ごりっぱ」になり、その「中身」も

変わっていたとしたら、あるいは少なくとも平蔵がそういう自己認識でいたとすれば、両者の関係性も変わっていただろう。そうすれば、刀傷という記号と3両という貨幣の交換も、実際とは別の、それに見合った意味を生んでいたにちがいない。たとえば、元牙僧女がかつて相手をした男の立身出世を知り、昔の関係をネタにして、男の体面を守ることと引き換えに金銭をせびり取った、というように。

世間から見れば、平蔵は「本所の鬼」（第1巻「本所・桜屋敷」、71）と呼ばれた無頼の過去（20歳前後）から、盗賊は言うまでもなく、おろくばかりかおもん婆も知っているとおり「鬼の平蔵」（322）こと盗賊改方長官の現在（45歳）へ、たしかに「出世」した。しかしおろくと再会した平蔵は、それをおくびにも出さなかった。なるほど外見や身分は武士、旗本、盗賊改方長官ではあっても、そんなものは世間が張りつけた記号にすぎない。それこそ平蔵の自己認識である。

おろくを前にした平蔵の「中身」は、そういう世間の記号、正確には「シニフィアン」（意味するもの＝武士、旗本、盗賊改方長官という外見や身分）が指示しているもの、つまり「シニフィエ」（意味されるもの＝武士、旗本、盗賊改方長官としての内実）と乖離している。それに反し、平蔵の「シニフィアン」（武士、旗本、盗賊改方長官という外見や身分）をそのまま、それが指示する「シニフィエ」（武士、旗本、盗賊改方長官としての内実）として受け入れているのが「世間」というものである。おろくはその「世間」の感覚に即し、体面を重んじると思われる現在の平蔵から、いくらかでも「金をねだろう」とした。しかしそのときの平蔵の自己は、そもそも「世間」という文脈から離脱していたと言える。

それを傍証するように、おろくは平蔵の予想外に堂々とした寛容さに「気圧され」たばかりか、平蔵の「あまりにもこだわりのない声音」に「虚をつかれ」（321）てもいる。これらはともに、おろくの目の前に、世間の文脈に囚われることなく、世俗の言説（たとえば「武士」、「旗本」、「盗賊改方長官」という用語を組み合わせた語り口）で名づけられることもなく、素のままの人間が現れ

たことを示唆している。「金をねだる」つもりのおろくに対し、平蔵がまったく屈託なく、堂々として寛容だったのは、むしろそれゆえ、と言えるかもしれない。そういう人間の佇まいのことを、いまでも世間では「肚が座る」と言う。

その結果、おろくの「金をねだる」という思惑は、武士、旗本、盗賊改方長官としての平蔵、つまり世間から見られている平蔵を通り抜け、おろくの「昔なじみ」としての平蔵へ届くと同時に吸収され、消えてしまう。そこに立っていたのは、かつて迷惑をかけ、世話にもなった女が困っていると見て、なんとか寄り添おうとした一人の男にすぎない。刀傷という記号と3両という貨幣の交換は、この二人の関係性を文脈にして意味を帯びる。それはたとえば、「思いやり」や「いたわり」と呼べるだろう。あるいは、江戸時代の人間なら、それらの意味も含めて「人情」（第1巻「血頭の丹兵衛」、118）と呼んだかもしれない³。平蔵を金蔓としか考えていなかったおろくと、「むかしの女」としてのおろくへ慈しみを見せる平蔵。両者のコミュニケーションのズレは、そこから生まれている。

他方、この物語には、おろくが「金をねだる」ことに及んだ男たちが、平蔵以外にもかなり出てくる。たとえば、新寺町の仏具商・万屋幸助、堀留町の醤油酢問屋・山崎屋の大番頭・藤蔵、本町の扇問屋・近江屋の番頭・徳太郎、浅草花川戸の料理屋・うろこ亭の主人・兼右衛門、大伝馬町にある木綿問屋・大丸屋の手代から入婿になった万吉（改め大丸屋仁兵衛）。これらの男たちは、登場順に三つのグループに分けられる。第一は万屋幸助、第二は藤蔵、徳太郎、兼右衛門、そして第三は大丸屋仁兵衛である。

これらのグループの男たちは全員、おろくに「金をねだられた」というより、おろくとの過去の関係につけこまれた格好で、自ら進んで、あるいは渋々「金を出さざるをえなかった」という点で共通し、平蔵のケースと区分される。はたして、その違いはどこにあったのか。それを平蔵自身との差、そしておろくとの関係性の差から説明しよう。そこからは、平蔵のときと異なる、別種のコミュニケーションの形が現れてくるはずである。

II おろくと万屋幸助

実はおろくは平蔵と再会する三ヶ月ほど前、第一グループの万屋幸助に10年ぶりに道で出くわし、そのときの出来事がきっかけになり、かつて相手をした男に「金をねだる」ことを思いつく。幸助は10年ほど前、牙僧女だった「おろくの女体」に溺れ「妻子を泣かせた」過去がある(326)。しかしいまのおろくには、自分の「老醜」を恥じる気こそあれ(そのため「顔を伏せ」たくらいである)、幸助に「金をねだる」という気はなかった(ibid.)。それなのに幸助は、まるで「ゆすり」や「たかり」にでも遭ったかのように狼狽し、おろくの胸元へ小判1両を押しこんでしまう。「こ、これでかんべんしておくれ。もう私をいじめないでおくれ。たのむ、たのむ…」(ibid.)。おろくは呆気にとられながらも「ははあ、なるほどねえ…」と妙に納得し、これに「味をしめた」(ibid.)。

そのときのおろくには、事の原理が呑みこめたわけではないが、何をどうすればどうなるかはわかった。「なにもゆすりをかけようというんじゃねえ、面を相手の前へ突き出してみるだけのことだ。それでいくらかになるんなら、もうなんだ、恥も外聞もありやしねえ」(327)。ここから「むかしのなじみ客」(ibid.)に「金をねだる」というおろくのアイディアは生まれた。しかしこんなことがどうして可能になるのか。幸助がおろくに教えてくれた偶然の成功体験は、どう理解すればよいのか。そもそも、幸助の1両は何と交換され、何を意味したのか。おろくが「ははあ、なるほどねえ」と納得したことはわかっても、それを原理から説明するのはちょっと骨が折れる。

手がかりになるのは、幸助がおろくに発した「これでかんべんしておくれ」と「もう私をいじめないでおくれ」というメッセージである。もう「いじめ」られるのはイヤだから、それを「かんべん」してもらうため1両を出すこと。幸助の「勘違い」(326)がなければ、これは「脅して金を巻きあげる」という点で、もはや犯罪である。しかしこの一連の流れは、すべて幸助の早合点から生まれたわけだから、おろくも言うとおりの「ゆすり」でさえなく、ましてや「かつあげ」ではない。「ゆすり」とは「人を脅したり、言いがかりをつけ、金品

を奪うこと」、そして「かつあげ」は「恐喝」を語源とし、「相手の弱みや秘密につけこんで、金品を出させること」だからである。

これでようやく、おろくに再会した幸助の心理構造がはっきりしてくる。つまり幸助は、おろくとの過去の関係とそれが及ぼす自他への影響を深読みし、なんの思惑もなかったおろくに思惑を読み取り、自分で自分の首を絞める結果になった。それでは、幸助は何について脅され、言いかがりをつけられたと思ひこんだのか、つまり、幸助が1両を払っても隠したかった「弱みや秘密」とはなんだったのか。それこそ幸助がおろくに「いじめ」られたと思った原因であり、1両という貨幣と交換されたモノにほかならない。

それを知るためには、幸助がおろくの「なじみ客」だった10年ほど前まで戻らなければならない。但し語り手は、当時の幸助について、わずか数行しか説明していない。その圧縮された語りの中から、幸助の「弱みや秘密」を解く鍵を取り出してみよう。

「幸助は、十年ほど前に、まだ〔牙儂〕のまねごとをしていたおろくに引っかかり、女房のほかには女の肌を知らぬという物堅い幸助だけに、腐敗の前の妖しげな香りをはなつおろくの女体へおぼれこみ、ずいぶんと入れあげて妻子を泣かせたものだ」(ibid.)

ここでもっとも目を引くのは、女房としか関係をもっていなかった幸助の「物堅」さである。それは一種の初期設定として、幸助が性欲望を抑圧し続け、おろくの誘惑に「引っかけり」やすい男だったことを暗示している。しかも当時のおろくは40歳を超えたあたりという計算になり、幸助も現在の「中年」(325)より10歳ほど若かったことになるから、おろくの女体は、おそらく幸助と同年代の女房にはなかった「腐敗の前の妖しげな香り」を醸し出していたことだろう。その結果、幸助はいまでも「いじめ」られたと思うほど、おろくに貢ぎ・貢がされ、妻子に辛酸を舐めさせることになった。こうした流れがすべて、さきほど引用した語り手による数行の説明にこめられていたわけである。

それでは、このどこに幸助の「弱みや秘密」は認められるだろう。

語り手によれば、幸助はおろくに「ずいぶんと入れあげ」たのだから、日々の家庭生活へのダメージが大きかったことは想像に難くない。それに加え、女房は夫のあまりの「女遊び」に苦痛も強いられただけである。もしかすれば、親戚縁者からも非難を浴びたかもしれない。それらのことが混じり合って、いまの幸助の「負い目」になっていることは十分に考えられる。しかしそれだけでは、おろくに再会したときの幸助の狼狽は説明できない。

そこでポイントになるのは、『鬼平』の舞台である江戸後期における「女遊び」の制度であり、それを座標にした幸助の「女遊び」の位置づけである。なぜなら、いまの幸助にとって、おろくとの過去との関係は、世間に顔向けできない意味合いを含んでいたと考えられるからである。

江戸時代の男たちにとって、性欲を発散させる場は「家」と「遊所」に大別されていた。江戸初期には、吉原（1617年）、新町（1627年）、島原（1641年）に幕府公認の遊廓がつくられ、『鬼平』の江戸後期になると、半公認の遊廓が「遊所」として各地に広がり、天保期頃（1830年－1844年）には松前から長崎まで201カ所を数えたという（沢山、92）。その結果、公認と半公認の「遊女」の陰に隠れる形で非公認の「売女」（かくしばいじょ 隠売女）が生まれ、いわゆる「自分稼」（じぶんかせぎ）も増加するに至って、幕藩の取り締りも強化されていく（沢山、104）。そうした状況の中から、呉服や小間物類を取り扱いながら、ひそかに売春をする女たちも現れた。それこそ「牙儷女」、世間が昔のおろくに与えたアイデンティティである。

他方、幸助の女房を含む「家」の女たちは、「貞淑な妻」や「貞女」という用語（性言説による分節）を世間からあてがわれていた。言うまでもなく、このルールはジェンダー・バイアスがかかっていたため、「家」の男たちには適用されなかった。たとえ幸助のように「女房ひと筋」に見える男たちでも、「貞淑な夫」や「貞男」と呼ばれることはなかった。というより、そういう用語（性言説による分節）がなかったのだから、それに呼応した存在が意識化されることもなかった、と言うべきだろう。「家」の外には男向けの性の市場が広がり、

女房以外の女たちへの男の性欲望は、公認の遊廓によって許容されていたからである。そこで改めて論点になるのが、その状況を座標とした、幸助とおろくの関係の位置づけである。というのも、幸助が「引っかかった」のは、性売買の制度化＝合法化＝正当化の枠から外れ、幕藩の取り締りの網を掻いくぐって「牙儂女」をしていたおろくの女性性の網だったからである。

性売買の歴史を振り返れば、近世初頭の段階では、非公認の「売女」は公認・半公認の「遊女」と区別され「はいた」と呼ばれていた。その「売女」が「かくしゆうじょ隠遊女＝非公認の遊女」として「遊女」の概念に包摂され始めるのは、元禄－享保の時期（17世紀後半－18世紀前半）だったという（曾根、25-28）。その流れを踏まえれば、性売買が大衆化した江戸後期に「牙儂女」として生きたおろくの存在は、二重に反世間性を帯びていたことになる。第一に、おろくの女性性（女性原理）は「自分稼」の女性性として、幕藩体制の管理＝公権力（男性原理）をすり抜け、公認・半公認の遊廓・遊所を脅かしている。第二に、おろくは「生殖の場としての『家』と快楽の場である『遊所』の区別」（沢山、105）を揺るがしてしまう存在である。幸助が深入りしたのは、この二重の意味で、江戸の庶民から見ても性欲望の危険地帯だったと言える。

そもそも男が女を買うこと自体、立岩真也のレトリックを借りれば、モノでない身体を、モノでないまま受け入れ、それをモノのように扱うことから快楽を得る行為である（立岩、222）。これを男に買われる女から見れば、モノでない身体を、モノでないまま差し出し、それをモノのように扱われることから快楽を与える行為である。その意味で、性売買が身体レベルを超え、生身としての人間存在をモノ化しながら支配する＝されることであるかぎり、その副次効果として、遊廓・遊所の存在は、公認・半公認を問わず家庭生活の安定を脅かし、世間の秩序を乱しうる。

ましてや幸助の場合は、公認か半公認かというボーダーさえ超え、さらに「魔が差した」というレベルも超え、「女房のほかには女の肌を知らぬ」男という初期設定どおり、「自分稼」の牙儂女としてのおろくの女体に溺れ、金銭をつぎこんで、性欲望の危険地帯から抜けられなくなってしまった。もう10年ほ

ど前のこととはいえ、それだけでも充分、妻子にも世間にも顔向けできない輩行と言える。しかし幸助にとってさらに忌まわしいのは、事もあろうに、自分の家業が仏具商だったことである。煩惱に囚われないことを教える仏門に関わる商売をしながら、自ら煩惱の塊と化した仏具商の主人…世間の笑いものになるのは避けられそうにない。

幸助にとって、おろくとの過去の関係は、これまで説明してきた理由から、どうしても隠しておきたい「弱みや秘密」になっていたと考えられる。幸助がおろくへ渡した1両は、その口封じであると同時に、おろくへの手切れ金としての意味をもっていただろうが、幸助自身の潜在意識を代弁すれば、世間の体面を保ち、いまの商売や家庭を守ることと等価交換されたのである。逆に、幸助から1両を受け取ったおろくは、おもん婆を「助手」にして、ゆすり・たかりを「新しい仕事」にしようと思ったとき、男たちとの過去の関係をモノとして商品化できる可能性を直観していたと言える（328）。その客にあたるのが、これから見ていく第二グループの男たちである。おろくが平蔵へ声をかけたのは、このグループでも成功体験を得たあとのことになる。

Ⅲ おろくと藤蔵、徳太郎、兼右衛門

それでは改めて、第二グループの男たちを列举しておこう。堀留町の醤油酢問屋・山崎屋の大番頭・藤蔵、本町の扇問屋・近江屋の番頭・徳太郎、そして浅草花川戸の料理屋・うろこ亭の主人・兼右衛門。ここから見えてくる三人の共通点は、全員が商人（商売人）であること、内訳は問屋二人、料理屋一人、そして役職は大番頭一人、番頭一人、料理屋の主人一人。つまり商人の中でも、なんらかの地位と役職をもっていると思われる者であり、特に山崎屋の藤蔵は「大番頭に出世している」（ibid.）と語り手が注釈しているように、経済力もありそうである。

しかしこのリストからだけでは、おろくがなぜこれらの男たちを「新しい仕事」のターゲットにしたのか、はっきり見えてこない。それを補完するため、さきほど見た幸助との偶然の成功体験を介し、おろくが学んだことを振り返っ

とおこう。ターゲットになりえるのは、たとえば「女房のほかには女の肌を知らぬ」ほど「物堅い」男であること、妻子を泣かせるほど「おろくの女体へおぼれ」、「入れあげ」たこと、世間で体面を保ち、いまの商売や家庭を守ろうとしていること、そして多少の金をもっていて、ちょっと押せばそれを出すこと
…

おろくのターゲットは、これらの要件をすべて満たしている必要はないが、基本となるイメージは、「家」の中では律儀・実直ではあるが、「家」の外では女遊びに耽ったことがあり、しかし同時に商人としての体面は保ちたいし、そのためなら金も出そうという男ということになる。ここまで、おろくの立場から幸助のケースが教えてくれたことをフィードバックしたが、おろく自身はもちろん、もっと気楽に、但しポイントは外さないよう考えていた。というのも、語り手は第二グループのターゲットについて、「いずれも世間体を気にする小心者で物堅い男たち」(ibid.) と、おろくを選択を代弁していたからである。

この条件にかなう面々さえ決まれば、あとはとんとん拍子。おろくはただ幸助のときに起こったことをトレースしながら「おや、おひさしぶりで…」と相手に語りかけ、但し今度は幸助のときと違って、金銭要求の意図をはっきりさせるよう「にやにやしながら」近寄っていただけである (ibid.)。そうすれば男たちは、いまや確信犯となったおろくの思惑を先読みして「顔面蒼白」(ibid.)、「戦々競々」(329)、いずれも「家へ来てもらっては困りますよ」、「二度と、こんなまねをしないでおくれ」(328)、「これをあげる。だから、ね、むかしのことはみんな忘れておくれ」(329)と異口同音に訴えてくる。おろくは男たちのこの条件反射を楽しみながら、まんまと金銭を稼げるわけだから、まさに濡れ手に泡である。

このグループの藤蔵、徳太郎、兼右衛門がそろって望んでいたのは、おろくに自分との過去の関係を忘れてもらうこと、ひいては、公私にわたり自分の体面を保ち、いまの商売や家庭を守ることである。こうして第二グループの三人も、第一グループの幸助と同様、これらの要件を一定の貨幣(「二分か一両、中には三両」(ibid.))と等価交換したわけである。見方を変えれば、そこそこ

の地位と役職にある男たちにとって、性売買の制度化＝合法化＝正当化の枠を外れた牙僧女と関係をもった過去は、それほど世間体を危うくするモノとしての価値を帯びていたことになる。その程度には、牙僧女という存在は、世間に内包された世間の外部だったと言える。それはジュリア・クリステヴァが、おぞましきもの、忌むべきものであると同時に、快樂を与える両価性を備えたものと説明した「オブジェクション」の色香を漂わせている⁴。

これまで考察してきたように、おろくは第一グループと第二グループから、方法こそ違え同種の成功体験を得て、次のターゲットを平蔵に定める。その経緯と結果についてはすでに論じたとおりであるが、第二グループからその延長としての平蔵までの流れには、おろくの行く末から考えて憂慮すべき点が含まれている。それゆえ、平蔵のケースから第三グループの大丸屋仁兵衛へ移る前に、そのことを確認しておこう。

おろくが幸助から得た1両は、すでに説明したとおり、あくまで偶然の産物だった。しかしおろくはそのからくりをシミュレーションし、それを「新しい仕事」のノウハウとして活かしたとき、犯罪への道を辿り始めた。おろくが藤蔵、徳太郎、兼右衛門にしたことは「相手の弱みや秘密につけこんで、金品を出させること」、つまり「かつあげ」そのものだったからである。しかしそこには、罪悪感や罪意識が入りこむ余地はなかった。「こいつは、こたえられねえ」(ibid.)。おろくはこのとき、三人から巻きあげた金銭、つまり昔の客との過去の関係が孕んでいる、貨幣との交換価値に目覚めたからである。

その自己認識があれば、いくら昔なじみだったとはいえ、おろくが盗賊改方長官の平蔵を次のターゲットに選ぶことはなかっただろう。事と次第によっては、犯罪者として捕まってしまうからである。さらに問題なのは、おろくが第一グループの幸助から学んだことを第二グループの三人に適用しながら、平蔵から学べたはずのことを学び損ね、そのまま第三グループの大丸屋仁兵衛へ接近したことである。その結果、おろくは第一グループと第二グループによって満たされた金銭欲に、平蔵からもらった3両をただ上乘せただけで、さらに同種の悪行を重ねていくことになる。それでは、おろくが平蔵から学び損ねた

こととは、いったいなんだったのだろう。

おろくは平蔵から受け取った3両の価値を、その額面どおりに信じた。いや、そういうふうには信じられなかった。それを傍証するように、おろくはおもん婆と、その3両を元手にちょっと贅沢な「酒もり」に興じ、「鬼の平蔵もおれが前じゃあ頭も上らねえわさ」と豪語している(330)。それゆえ、平蔵がくれた3両に、そして自分へかけてくれた言葉に、すでに見たとおり、まさか「思いやり」や「いたわり」が託されていたとは考えられなかった。言い換えれば、平蔵の3両や言葉は、「思いやり」や「いたわり」を指示するシニフィアン(意味するもの)として、それに見合ったシニフィエ(意味されるもの)を求めて宙を舞う未完の記号だったと言える。しかし第一グループと第二グループの男たちから、金銭にまつわる成功体験を得たおろくには、まさか貨幣と言語に共通した、そんな人間のやりとり=コミュニケーションの形があるとは思ってもしなかっただろう。

というより、そもそもあの3両は、おろくがもっているどんなモノとも交換されなかったように見える。平蔵にとって、おろくとの過去の関係は「弱みや秘密」にならなかったからである。それどころか、平蔵はおろくとの過去の関係によって男になり、大人になり、人間になりえたという意味で、おろくに恩さえ感じていたかもしれない。その観点から見れば、あの3両は、それへの返礼として差し出されたとも考えられる。「思いやり」、「いたわり」、そして「成熟への恩」、いずれにしろ、平蔵の価値観には、貨幣との交換になじまないモノが含まれている。それと裏腹に、おろくの価値観では、「男との過去の関係」に象徴されるように、貨幣と交換できるモノなら商品になる。それゆえ、おろくと平蔵のやりとりは、等価交換とさえ呼べない貨幣の受け渡し、喩えて言えば、近代人の戯画(おろく)と前近代人のプロトタイプ(平蔵)の、なんと不可解なコミュニケーションである。

さらにそれと関連することだが、おろくには、平蔵がかけてくれた言葉もうまく受けとめられなかった。「足らぬところは、いつでも清水門外の役宅へたずねておいで」。そう平蔵に言われたときにも、おろくは貨幣の額面と同様、

その字面をそのまま受け取ればよかっただけである。しかしそうしなかった、いや、できなかった。平蔵の言葉と真意が、どうしても乖離しているように思えたからである。つまり、元牙僧女の自分が盗賊改方長官の役宅を訪ねることなどありえない、とおろくは思った。そんなことをすれば「それこそ取っ捕まって、石川島の寄場送りだ」とおもん婆が忠告したときにも、おろくは「ちげえねえ」(322)と同意し、それを裏づけている。

おろくがようやく「なあに、今夜はおやしきへ遊びに行くわさ」と言い放てたのも、酒の力を借りた「怪気炎」にすぎない(330)。階級・地位の差に関する世間の通念は、それほど深く、おろくにもおもん婆にも内面化され、身体化されていたと言える。他方、おろくを前にした平蔵は、すでに説明したとおり、そうした世間の通念より人間性や人間関係を重んじている。もしおろくが身分や役職に囚われることなく、平蔵の言葉を真に受け、銜のない人柄を信じ、平蔵を盗賊改方の役宅へ訪ねていたら、そこで犯罪への道も閉じ、雷神党一味にも殺されずに済んだかもしれない。しかしおろくは、平蔵からのメッセージを受け取り損ね、第三グループの大丸屋仁兵衛に迫って死への道を加速していく。

IV おろくと大丸屋仁兵衛

大丸屋仁兵衛は17年前、20代前半の手代・万吉だったころ、「若い男の肌が好きなおろく」(329)にかわいがられた。いまごろ番頭くらいになっているのでは、と思ったおろくの予想を超え、万吉は大丸屋の婿養子になり、仁兵衛として大身代を継いでいるではないか。それを知ったおろくは「腐魚のような双眸に、異様な光」(331)を宿したくらいだから、このときにはもう後戻りできないほど守銭奴になっていたと言える。しかも仁兵衛は、おもん婆によれば、商売では「大した腕きき」なのに、女房には「てんで頭が上がり」ないので「養子にはもってこい」(ibid.)というから、第二グループの「世間体を気にする小心者で物堅い男」のイメージに重なる。「うまくゆけば、十両にはなる」(332)。おろくがそう思ったほど、仁兵衛は理想のカモとして造型されている。

実際、おろくが料亭へ向かう仁兵衛の前へ立ちふさがり、「万ちゃん、りっぱにおなりだねえ」と声をかけると、仁兵衛は「きゃっ…」と叫んでしまう(ibid.)。このときの仁兵衛が「言語に絶する」(ibid.)ほど狼狽し、5両入りの財布をさっさとおろくに渡してしまったのは、供の手代への体裁を取り繕う必要があったからである。言うまでもなく、その態度は「大丸屋という店＝婿入りした家」のために世間体を保つこととリンクしている。それを裏づけるように、仁兵衛は第二グループの男と同様「お店へ来てもらっては…」(ibid.)と洩らし、おろくとの過去の関係を隠すと同時に、商売と家庭を守ることを5両と交換したことを窺わせる。

「お店へ来てもらっては…」この仁兵衛のディフェンスは、本人の意向と裏腹に、オフェンスの標的と可能性を相手に知らせてしまう。というのも、おろくは「ときどき外で会っておくれなら、ね」と「にやりと釘をさし」、仁兵衛との過去の関係がもうしばらく商品になることをほのめかすからである(ibid.)。つまり、おろくがこれからやろうとしていることは、「女体と貨幣を非合法に交換した男たちの過去」を可能なかぎり貨幣と交換し続けることである。そのためには、それに「秘密」という不可視のラベルを張り、新しい商品として昔の客に差し出し、買わない場合にはそのラベルを剥がして「秘密」を開くという条件をつけ、金を払い続けるよう仕向ける必要がある。もちろん、「秘密」を開いてしまっただけは商品としての潜在力は失われるので、それをできるだけ長く、閉じたまま保存すること。それこそ、おろくにとって「秘密」を扱う最善策、腕の見せ所である。

さすがのおもん婆も「だ、大丈夫かえ、おろくさん」(333)と、その商売ぶりを危惧したのは、このように、おろくの荒稼ぎがどんどん強引・巧妙になってきたからである。しかしおろくは「これまでの男どもを年に二度もいたぶってやれば、死ぬまで飲み暮らせるというものさ」(ibid.)と、手持ちの「秘密」を繰り返し商品化し続けようとする。平蔵との階級・地位の差に関して、あれほど深く内面化され、身体化された世間の通念も、おろくの中で暴走し始めた「商品と貨幣の交換」を可能にする力、マルクスの用語を借りれば「物神」(フェ

ティシュ)を抑える超自我にはなりえなかった。

その主要因として考えられるのは、階層、ジェンダー、家族構成に関する男女の非対称性である。第一グループから第三グループまで見通しても、過去の性売買にまつわる個人情報を商品化したところで、当事者となる男たちは苦しんでも、おろくはダメージを受けていないからである。昔の客との過去の関係を蒸し返せば、牙僧女だった自分の過去もまた明らかになる。それは男にはない女ゆえのリスクだが、おろくには心配無用。たとえ誰かに知られても、いまでも世間の底辺を生き続けている身には、どうということもない。それに加え、おろくは元から「捨子」、「身寄りもない」(327)という設定だから、牙僧女だったという過去を誰かから「秘密」として売られても、それを買ってまで守る店も家庭もない。

他方、おろくが相手にしている男たちは、いまやそれなりの地位と役職に就き、商売や家庭もあるからこそ、それを損ねたり失ったりする可能性がある。おろくがつけこむ隙は、その階層内の落差の可能性から生まれ、それはさらに、おろくを買ったという過去が「秘密」になり「商品」になる確率を高める。その意味では、おろくの荒稼ぎは、男の立身出世のヒエラルキーに依拠している。但し女の地位や役職が高くなれば、やはり同様の転落は起こりうる。たとえば、牙僧女だった過去を隠し、老舗の大店へ嫁入りした内儀がいたとすれば、と想像してみればよい。そんな観点から、日本の戦後を背景に、「パンパン」(米軍を相手にした娼婦)と呼ばれた女を主演に配し、時代の推移と社会の構造に翻弄された女の犯罪と没落を描いたのは、松本清張の『ゼロの焦点』(1959年)である。

それでは、おろくの荒稼ぎに待ったをかけ、そこにつけこんで、おろくを死へ追いやるきっかけになったのは、なんだったのか。その元を探れば、やはり女、それもなんとおもん婆に辿り着く。このおろくの相棒には、死別した伊七との間に、料理屋の女中になった娘・お松がいる。おろくの悪行は、おもん婆からお松を介し、お松の夫・虎松から漁師仲間の伝五郎を経て、雷神党という極悪非道の連中へ伝わってしまう。程度の差こそあれ、第1巻の他の7篇にも

見られたことだが、この物語でも、おもん婆とお松という女たちは、母娘の連携を通し、結果的ではあれ、事件を展開させる媒介（メディア）として働いている。

「こんなこと、だれにもいっちゃあいけねえよ」（334）。それは「だれかにいっちゃう」こととほぼ同義である。おもん婆は「このごろのおろくさんの鼻息のすさまじいことといたら」（ibid.）と、娘のお松へおろくの荒稼ぎを伝えたとき、それを証明してしまう。というのも、お松も「けどお前さん、だれにもいっちゃあいけないよ」（335）と母から聞いた話を夫の虎松へ伝え、おろくの「秘密」を仲介してしまうからである。

「秘密」はそれを所有した者を支配し、毒として体内を巡る。誰かに先送りするなり、何かと交換するなりして排出すること。虎松もまた、この教えを実証するように、妻のお松から釘を刺されたときに「わかっていらあな」（ibid.）と請け合いながら、鉄砲洲の賭場へ出かけるや、漁師仲間の伝五郎へ「実は、女房のおふくろの友だちで、おろくさんというのがな…」（ibid.）と禁を破ってしまう。伝五郎は翌日、雷神党の首領・井原惣市へ「昨夜、おもしれえはなしをききこみやして」（337）と伝え、おろくの「秘密」を1両と交換してしまう。このすり替えによって、伝五郎は「秘密」の毒が自分に回るのを防ぐと同時に、「秘密」の伝言ゲームを打ち止めにする。物語の構成・展開から見れば、このとき「秘密」の売人としてのおろくの役割は終わり、それと同時に、おろくの人生も終わったと言える。

残された問題は、おろくが商品化した過去の「秘密」を最後に手に入れた悪党の井原が、どのようにその毒を消したか、というより、それを何と交換したかである。但し井原はその方法を考える必要さえなく、おろくが昔の客にやってきたことをマニュアル化し、それを「大仕事」（338）のレベルへ引きあげればよかっただけである。しかも、そのターゲットまですでに用意されている。おろくが5両を巻きあげた第三グループの大丸屋仁兵衛、つまり「かつあげ」の格好のカモになることを、すでにおろくによって証明された商人である。それになんと言っても、大丸屋は「大身代」（331）で名を馳せる大店、殺人さえ

厭わない井原にとって、これにまさる金蔓はなかつただろう。この一連の流れからもわかるとおり、井原という男の悪巧みも、結局、おろくという女によって演出され、その根底には、牙僧女だったおろくの女性性が伏流している。

V おろくの死と「むかしの女」の蘇生・鎮魂

井原惣市の作戦は大胆極まりない。自らは紋付羽織袴で正装し、配下の浪人二人にも身なりを整えさせ、大名・相馬因幡守の家臣・芳賀井主馬^{はが いしゆめ}と名乗って大丸屋へ乗りこむ。そのこけおどしの記号に騙された仁兵衛に、井原はおろくの「義理の弟」(339)と偽り嘘八百の脅しをかける。実はおろくが仁兵衛の子を産んでおり、当年、嫁入りすることになった。ついては「実のむすめの嫁入り支度」(340)に100両を出してもらいたい。おろくの名前が出ただけで「動顛」(339)した仁兵衛、今度は「胴ぶるい」(340)まで始め、老番頭を言いくるめ、妻の眼をかすめ、井原へ大金を渡してしまう。「な、なにぶんにも御内聞に…」(340)。すべては臆病者が「恐怖の域」(ibid.)に達したゆえの愚行である。

この仁兵衛の間抜けぶりは、ほとんど被害者による幫助と思えるほど戯画化されているが、井原がそこまで仁兵衛を追いつめるのに「秘密」を二重化していた点は注目に値する。第一に、おろくの荒稼ぎにまつわる「秘密」を今回の「大仕事」のマニュアルとして利用したこと、第二に、おろくと仁兵衛の隠し子にまつわる「秘密」をゆすりのネタとして新たに捏造したこと。これらの「秘密」に盛りこまれた毒が、どちらも、世間の汚点になりうる男の性欲望を素材にしていたことは見逃せない。第一は「牙僧女を買った過去」、第二は「牙僧女との間に生まれた隠し子」。両方に共通しているのは、愚かしい男の存在に見えて、実は男の性欲望が生んだ悲喜劇のゴーストライターとして身を潜めている女(牙僧女)の存在にほかならない。仁兵衛がおろくも井原に「加担」(341)しているのではないかと疑ったのは、その意味ではあたっている。井原はおろくの女性性の力を利用して、仁兵衛から100両を奪い取ったからである。

これで大丸屋の問題も一段落、になるはずだった。そうならなかったのは、仁兵衛の臆病さを除けば、ひとえに、おろくに勝る井原の貪欲さのせいである。井原は大丸屋との成功体験に増長し、100両で毒抜きしたはずの「牙僧女との間に生まれた隠し子」という「秘密」を再利用する。(同じ「秘密」を繰り返す金もうけの手段にするのも、元はおろくが仁兵衛に試そうとしたことである。)それを可能にするため、井原は仁兵衛へ「無茶苦茶な文面」(346)の脅迫状を送り、さらにとんでもない要求を突きつける。おろくが100両では納得しなかったので、そちらへ迷惑がかからないよう「おろくの首を打ち落とし」(ibid.)たい。大丸屋との縁切りと「おろく供養」(ibid.)のため、500両を深川・藤ノ棚、専光寺裏空地へ持参すること。承諾しなければ、「おろく塩漬けの生首」(ibid.)を大丸屋へ届ける。

このときまでには、雷神党の「ゆすり、恐喝、暴行、無銭飲食」(336)はすでに世間に広まっており、平蔵は深川・末広町の百姓家が雷神党の「根城」(342)であることも掴んでいる。さらに旧友・岸井左馬之助からも、「あいつら、このごろ度がすぎるといって、平蔵さん」(343)と進言されている。そこへ密偵・相模の彦十から、おろくの住まいと最近の景気のよさについて報告が入る。読者がいよいよ平蔵のお出ましかと期待し始めたころ、作者は雷神党の動きをそれにシンクロさせ、タイムリーに「異変」(345)を導入して物語を急転(ペリペティア)させる。おもん婆の絞殺と、おろくの拉致である。

すぐに平蔵はおろくの家へ駆けつけ、長屋の連中への聞き取りから、おろくが「むかしなじみの男たちをゆすって歩いていた」(347)ことによく思い至る。これほど平蔵の気づきが遅れたのには、それなりの理由がある。すでに繰り返し説明したとおり、平蔵にとって、おろくとの過去の関係は「弱みや秘密」にならなかったからである。まさかおろくが自分に対して、26年も前の出来事を貨幣と交換しようとしていたとは…これこそ、おろくに3両を渡しながら、それに「思いやり」や「いたわり」を託した平蔵の盲点である。つまり、おろくには平蔵の心配りが見えなかったが、「勤ばたらき」に優れているはずの平蔵⁵にも、おろくの牙僧女としての過去の意味と価値(貨幣と交換されう

る商品としての牙儂女の過去)が見えなかった。

振り返ってみれば、それがいととなっては、平蔵の初動捜査を遅らせ、おろくを死なせてしまう一因になったと言える。平蔵自身も物語の最後で、左馬之助に「一足おそかったな」と言われたとき、「おれだとして神わざを持っているわけではねえのだよ」と返している(356)。しかしこのときの平蔵に必要なしたのは、「神わざ」ではなく、牙儂女だったおろくの過去と、それがおろくの現在に投げかけた影への想像力だった⁶。おろくに再会した時点で、平蔵が現実主義者としてそれに気づいていれば…やめよう、物語はあるがままに流れ、この段階で、おもん婆ばかりか、雷神党の浪人が漏らしたとおろく、おろくももうこの世にいないからである。「床下にくろがっているおろく婆あめ、腐りはじめたのか」(352)。

但し雷神党は、おろくを消すことによって、仁兵衛を脅かした「秘密」の起源を消しながら、その仁兵衛によって消される巡り合わせになる。井原から500両を要求された仁兵衛は、思いあまって御用聞き・文治郎にすべてを打ち明けたからである。しかしこれはもちろん仁兵衛が「肚を据えた」からではなく、どうしようもなくなったからであり、「文治郎なら、内密でかたをつけてくれよう」(341)と思ったからにすぎない。さすがの文治郎も、「盗賊改メの長谷川さまなら、どんなことを打ちあけても安心でございますと、あれほど私が…」(348)とあきれ顔。それでも仁兵衛は、「けれど文治郎さん、だれにも知られずに…」(ibid.)、「女房や番頭たちに知れましたら、これはもう、私の立つ瀬も浮かぶ瀬もないので」(349)と、あくまで保身に走る。つまり、仁兵衛は最後まで「世間体を気にする小心者で物堅い男」を絵に描いた人物、つまり「フラットキャラクター」を演じ切る。

そんな仁兵衛の変化のなさ=成長のなさを見抜き、文治郎は「知れたところで大したことはございませんよ」(ibid.)と一喝、さすが日頃から平蔵を慕っている人間、仁兵衛とは「肚の座りよう」が違う。それに比して仁兵衛の不甲斐なさ、しかしそんな人物も、文治郎はもとより、平蔵の引き立て役としては適任である。文治郎から大丸屋の一件を聞くや、平蔵は文治郎へ指示を出し、

「肚が座る」とはどういうことか、その範を垂れる。「帰って大丸屋の主人に、こうつたえておけ、もはや何事も案ずるな、まくらを高くしてねむれ、とな」、但し「仁兵衛のような男は女房以外の女に気をゆるしてはいかぬ…こう長谷川平蔵が申ししていたとつたえておけ」(ibid.)。ここで平蔵は、男を惹きつけ、惑わせ、人生を狂わせかねない女の力に注意を促しているが、そんな平蔵にも、牙僧女だったおろくの女性性の波及効果は見えていなかったことになる。

おろくにとっては遅ればせながら、平蔵はその夜、左馬之助と配下の二人とともに雷神党の隠れ家へ討ち入り、首領の井原と浪人七人を斬り倒す。これによって、大丸屋仁兵衛は自ら手を汚すことなく、牙僧女を買ったという過去の「秘密」を二重に断ち切ったことになる。雷神党がおろくを始末してくれ、その雷神党も平蔵たちによって成敗されたからである。このとき、雷神党がおろくを殺すことによって、仁兵衛と大丸屋を救う結果になったのは、世間に広がる「不条理の反復、交錯」(第2巻「蛇の眼」、16)の一例と言えるかもしれないが、ある意味、悪が善になりうるという点で、池波正太郎の人間観をやや振れた形ではあれ反映している。第2巻の「谷中いろは茶屋」で平蔵も言うとおり、「善事をおこないつつ、知らぬうちに悪事をやってのける。悪事をはたらしつつ、知らず識らず善事をたのしむ。これが人間だわさ」(106-107)。

最後に残された問題は、床下から発見された、「死臭をはなつ、おろくの、その骨と皮ばかりの死体」(356)の物語上の機能である。平蔵は「こやつ、気の善い女だったが…」とささやき、「おれが菩提所へほうむってやろうよ」と誓う(ibid.)。このとき、おろくの死がにわかには象徴性を帯び始める。「骨と皮ばかりの死体」から漂う「死臭」は、弔え！という命令を発していたように思えるからである。その声なき声は、おろくという一人の女の存在を超え、男たちと交わりながら、その男たちによって忘却の淵へ追いやられ、不在の存在として放置され続けた、名もなき無数の女たちを源泉として発せられている。おろくの死を無駄にしないためにも、この観点から改めて、おろくと昔の客たちの関係を捉え直してみる必要がある。

たしかに、おろくは自分を買った客たちを相手に、過去の関係を貨幣と交換

しようとした。しかし男たちにとって、おろくという存在も、おろくとの過去
の関係も、すでに無意識の層へ抑圧されている。それが突如、路上で「顔」を
覗かせたわけだから、その衝撃はまさに、フロイトの「不気味なもの」の顕現
を思わせただろう。「不気味なもの」とは、まったく身に覚えのないものでは
ないどころか、「内密にして慣れ親しまれたもの、抑圧を経験しつつもその状
態から回帰したもの」（フロイト、42）だからである。

無意識の層から浮かびあがった「不気味なもの」は、それを巡る言葉であれ、
それを想起させる場所であれ、現実の何かと置き換えられなければ弱まること
はない。その観点から見れば、おろくが男たちを相手に、過去の「秘密」を貨
幣と交換しようとしたことも別の意味を帯びてくる。つまり、それは単なる
「ゆすり」や「かつあげ」ではなく、男たちが当時の性売買を忘れ、それに関
わった女を弔うことを怠っている現実への、牙僧女からの呪い=崇りを表して
いる。それこそ、柄谷行人が言う「交換に保証を与え、また拘束力を与える靈
的な力」（柄谷、47）の正体、つまり、おろくと男たちの取り引きを可能にし
た「物神」の正体であり、おろくが商品化した過去の「秘密」に秘められた毒
の中身であり、おろくに出くわした男たちを襲った「不気味なもの」の内実で
ある。

言い換えれば、男たちにおろくとの「秘密」を貨幣と交換するよう強いたの
も、おろくという存在や過去の関係に見えて、実は「むかし女」の呪い=崇り
の力である。それゆえ男たちは、おろくとの「秘密」を貨幣と交換することで、
その呪い=崇りを鎮めることができる。目の前に現れた死者（忘れ去られてい
た「むかしの女」との「秘密」の毒を消すこと、つまり死者の呪い=崇りの
解毒こそ、生者（「むかしの女」を忘れ去っていた男たち）にとって「弔う」
ことの意味である。それゆえ、大丸屋との縁切りに加え「おろくの供養」とい
うことで、雷神党の井原が仁兵衛に500両を要求したことは、文字通り法外な
ことに見えて、井原本人の思惑を超え、「弔う」ことの真意に触れている。

物語の最後で、平蔵がおろくを自分の菩提所へ葬ろうと決めたこと、それは
おろくという個別の女ばかりでなく、象徴としての「むかしの女」を悼むと同

時に、その呪い＝祟りを鎮め、弔うための儀式を担うことである。それゆえ、平蔵が建てるおろくの墓は、おろくを含む「むかしの女」が、ようやく不在の存在としての指標を与えられることを示唆している。そのとき「むかしの女」は、いないものはいない、と思っていた男たちの意識の中で、いないのにいる、という逆説を生きるだろう。「むかしの女」という短編は、その意味で、情交を結んだ男たちに忘れ去られた女たちの、男たちによる蘇生と鎮魂の物語にほかならない。

注

- 1 本稿のテキストは文春文庫の「決定版」。シリーズ・最終巻の『誘惑』は「オール讀物」の1990年4月号まで掲載されたが、同年5月3日に作者が逝去したため未完である。
- 2 本稿では事の順序を優先し、近年の「性買売」ではなく「性売買」を使用する。
- 3 源了圓は江戸時代から現代（1960年代）に伝わる人情本の「人情」について、「人の哀しみを知り、思いやり、それと共感的関係にはいること」（20）と説明している。これは平蔵のおろくへの思いとも重なる。
- 4 「おぞましきものに化するのは…同一性、体系、秩序を攪乱し、境界や場所や規範を尊重しないもの、つまり、どっちつかず、両義的なもの、混ぜ合わせである」（クリステヴァ、7）。
- 5 平蔵の「勘ばたらき」については、第2巻「蛇の眼」（11, 13）、第12巻「白蠅」（326）、第13巻「春雪」（235）、第15巻「赤い空」（69）、第18巻「おれの弟」（242）を参照。
- 6 平蔵は第18巻の「おれの弟」でも、男女関係の性言説に囚われて「勘ばたらき」が鈍り、弟分の滝口丈助を「見殺し」（242）にしている。

参考文献

- 池波正太郎（編）『鬼平犯科帳の世界』（文春文庫、2011年）
池波正太郎『鬼平犯科帳〈番外編〉乳房』（文春文庫、2013年）
———『〔決定版〕鬼平犯科帳』全24巻（文春文庫、2016年－2017年）
氏家幹人『江戸の女の底力』（世界文化社、2005年）
笠井哲「池波正太郎『鬼平犯科帳』における人間観」（福島工業高等専門学校「研究紀要」第52号、2011年、69-74）
柄谷行人『力と交換様式』（岩波書店、2022年）

- クリステヴァ、ジュリア『恐怖の権力〈オブジェクション〉試論』（法政大学出版局、2005年）
- 里中哲彦『「鬼平犯科帳」の真髓』（現代書館、1998年）
- 沢山美果子『性からよむ江戸時代』（岩波新書、2020年）
- 重松一義『鬼平・長谷川平蔵の生涯』（新人物往来社、1999年）
- 曾根ひろみ『娼婦と近世社会』（吉川弘文館、2003年）
- 立岩真也「何が〈性の商品化〉に抵抗するのか」、江原由美子（編）『性の商品化』（勁草書房、1995年、203-231）
- 鶴田武志「池波正太郎『鬼平犯科帳』のイメージ形成を巡って ～小説とテレビの往還、そして、アニメ「鬼平」へ～」（中京大学先端共同研究機構文化科学研究所「文化科学研究」第31巻、2020年、21-51）
- 西尾忠久『「鬼平犯科帳」に恋して候』（清流出版、1997年）
- フロイト、ジグムント『フロイト全集〈17〉』（岩波書店、2006年）
- 源了圓『義理と人情』（中公新書、1969年）